

# ひとの動き (敬称略)

1月11日(水)～2月10日(金)

## birth お誕生おめでとう

住所	氏名	性別	保護者
田口上村	玲音	女	鴻幸
豊内緒方	悠成	男	彰
岩下田上	紗世	女	知宏
田口田上	乃南	女	律和
志田菊谷	源志朗	男	剛和
上揚中村	友星	男	秀敏
仁子川辺	茉莉子	女	晃和
下横田田上	菜実	女	和

## marriage ご結婚おめでとう

住所	氏名
〔夫〕 韓国 権純	〔妻〕 柱笑
〔夫〕 豊内 大濱	〔妻〕 由博
〔夫〕 津志田 葉山	〔妻〕 純子
〔夫〕 熊本市 松嶋	〔妻〕 裕昭
〔夫〕 仁田子 竹田	〔妻〕 忍
〔夫〕 八代市 黒木	〔妻〕 祐一
〔夫〕 中山 益田	〔妻〕 美里
〔夫〕 熊本市 岩岡	〔妻〕 翔太
〔夫〕 白旗 岡本	〔妻〕 優希
〔夫〕 山鹿市 白石	〔妻〕 力
〔夫〕 下横田 溜淵	〔妻〕 佳苗
〔夫〕 熊本市 原口	〔妻〕 雄二
〔夫〕 豊内 米原	〔妻〕 明子
〔夫〕 熊本市 松本	

## condolence お悔やみ申し上げます

住所	氏名	年齢	世帯主
仁田子 舛田	信江	88	正一
船津 甲斐	キヨ	98	幸夫
糸田 緒方	セツ子	83	洋一
府領 本田	光義	88	光広
田口 吉富	ミツル	95	公洋
世持 園田	美知	83	芳明
芝原 西山	昌	82	英子
津志田 餅崎	寛	77	陽子
上早川 山本	利秋	67	紀子
仁田子 佐藤	直人	94	ツヤ
中山 古閑	恭子	74	秀敏
吉田 吉本	勅雄	83	忠則
上早川 藤本	ミツル	97	一也
仁田子 一村	一志	93	次男
横田 村上	隆子	79	明
田口 和田	とめ子	96	秀昭
芝原 酒田	一明	82	明博
芝原 里形	政子	91	昇
西原 鎌田	盛秋	82	桂一郎

## Data 甲佐町の人口・世帯数

項目	数	増減
男	5,427	2
女	6,077	△2
計	11,504	0
世帯数	4,218	3

平成24年1月31日現在

〔町史編さんだより〕

緑川の落鮎を捕る竹製の簀(す)、鮎料理を楽しむるわらぶきのあずま屋などがある豊内の築(やな)場は、甲佐町を代表する観光地です。築場が江戸時代に始まり、藩主米遊の場所であったことはよく知られています。当時は、甲佐町一帯に相当する地域を担った甲佐手永(てなが)と呼ばれた行政機構が管理していました。明治維新となり、明治3(1870)年、築の廃絶通知が熊本藩から甲佐手永に届きました。藩では新しい時代に対応するために行財政改革が始まり、緑川と菊池川に設けられていた藩営の築の廃止が決められたのです。翌年には廃藩置県が行われ、まさに近世から近代への転換期で、旧時代の

江戸時代以来の由緒ある緑川の築(やな)



## 甲佐の歴史を紡いで

～町史編さんだより(41)～

## 明治維新を乗り越えた築(やな)

町史編集委員 栗谷昌史(近代)

施設は存亡の危機にあったと言えます。当時、甲佐手永の御築支配役・甲斐武英の文書によると、「築は放っておけば崩壊するだろう。しかし、築小屋や塩置蔵などは藩の財産であり、管理することも大変なので、入札にかけ一般に払い下げ

たらどうか」という方針が、甲佐手永で示されています。藩営の築としての歴史は明治3年に終わりましたが、その後も築の管理は、地元豊内村、そして水利土功会(すいりどこうかい)に引き継がれたようです。同会は、緑川の鷯ノ瀬堰(うの

せせき)の近くで取水された用水路を利用する1町11村によって発足し、用水などを管理しました。さらに、明治27(1894)年、甲佐町長を管理者とする甲佐町外三箇村(龍野、白旗、乙女)普通水利組合が成立して、築場の入札を執り行うようになりました。こうして、第二次大戦後につながらり、現在の甲佐町および甲佐町土地改良区による管理運用に至るのです。江戸時代以来の由緒ある築場の光景を見る時、私たちは、築を残し、守り伝えてきた先人のことにも思いを馳せたいものです。『甲佐町史』編さんに関するお問い合わせ先 町社会教育課町史編集係 ☎096・234・3310

未曾有の地震が日本を大きく揺さぶり始めたあの日から、もう1年、まだ1年。傷跡は深く、復興の道程は依然として険しい。あの日のあとき、とある撮影の待機中で眺めたTwitter(ツイッター)のタイムライン。流れの速さが尋常じゃない様子から、「何か」が起こったことを発生してから1分後の時点で察知。すぐに職場のテレビをつけ、規模の見えない地震の深刻さと同時に、約30分後に押し寄せるであろう津波の存在を確認した。1分1秒を争う非常時であればあるほど、いかに早く正確な情報を入手して的確な判断を下し、適切な準備の下で危険を回避する対応ができるかが重要。町が導入した「エリアメール」も見逃(こ)してはならない非常時の情報源。不測の事態を普段から意識して、安全・安心を積み上げたいものです。(C)

編集後記